

「菅義偉首相、総裁選に不出馬」

2021年09月09日

9月3日、菅義偉首相は総裁選に不出馬を表明し、辞任することになった。そうなのだと納得できる。コロナ対策は後手後手に回り、入院治療が受けられず、自宅で死亡する人が急増し、とても、先進国とは言えない。表情が固く、言葉に説得力がない。何より、国民の声を聞かず、自分の権力維持に心を向け過ぎていたのではないか。

「東京新聞」の、愛読している「本音のコラム」の著者7人が述べた「菅首相へ送辞」を「こちら特捜部」にまとめている。興味深いので、簡略に紹介したい。

青山学院大学名誉教授の三木義一氏は、菅政権が信頼を失くした決定的な出来事は五輪の強行だと言い、「コロナの感染状況を考えれば中止すべきだった。国民の命を危険にさらしても経済を優先する姿勢があらわになった」と、命より経済を優先することを批判している。Go Toも五輪も、専門家は当初から懸念を述べていたが、耳を貸さなかった。肝心な時に、専門家の意見を無視し、恣意的に政策を進める危うさは、今後もあるだろうと言い、「自民党総裁交代という小手先の変化ではなく、政権交代が必要。衆院選で国民の判断力が問われる」と、総選挙で国民の責任ある判断力が重要であると語っている。

ルポライターの鎌田慧氏は、オリパラを巡り、膨大な借財が残された事実を述べ、「開催で東京都や国の財政は相当、厳しくなった。巨額な借金を抱えた上、国立競技場などは赤字が続く恐れもある。そうした失政を最後まで認めず、みっともない政権の末路をさらした」と手厳しく批判している。私は、政治家は自己正当化せず、過ちは即座に謝った方がいいと思っている。菅首相は、内実のない「安全・安心」が口癖であった。

文芸評論家の斎藤美奈子氏は「菅政権の一年間は、ひと言で言うと、スカでした」とばっさり切り捨てる。斎藤氏は、菅政権が残したものは何だったかの問いに「国民の間で『このままではだめだ』という危機感が広がり、意見を表明する人が増えたことかな。コロナ禍で政治のひどさが自分たちの生命や生活を脅かすと実感した人は少なくないから」と語っている。斎藤氏の言葉は辛辣であるが、常に、希望を与えてくれ、私はファンである。

ジャーナリストの北丸雄二氏は、「五輪とコロナ対策はアクセルとブレーキを一緒に踏むようなもので、車が壊れるのは当たり前だ」と、イベント自粛や人流抑制ができず、コロナ収束対策に揺らぎがあったと指摘している。（菅首相の）「辞任は政治責任を取ったのではなく、単なる総裁選での党内票数を問題にしたのであって、彼らの理屈の中で起きた辞任で、内輪の論理でしかない」と、政府に憤っている。

看護師の宮古あずさ氏は、「コロナ問題に対応できなければ、本来なら政権交代すべきだ」と手厳しい。菅首相は「自助、共助、公助」と言うが、結局、自宅療養など「自助」ばかりを求めている。宮古氏は、「菅氏は元々、公の力で格差を是正する気が全くない人だ」と批判し、自民党全体が、菅氏のような考えになっており、誰が次の総理になっても同じだと嘆いている。そして、報道が政局一色になることを危惧している。

文部科学次官を務めた前川喜平氏は、日本学術会議の会員6名の任命拒否をしたことから、「学問の自由に対する尊重の念がない。そこまで露骨にするのは菅氏くらいではないか」と批判している。菅首相の辞任によって、「これまでのような官僚に対する締め付けはなくなるのではないか。ほっとしている官僚も多いだろう」とも述べている。

文筆家の師岡カリーマ氏は、菅氏には「愛されたいという不安の発露」があり、レガシーを残すためには国民に「愛されることではなく、愛することだ」と指摘し、菅氏には「もっと愛してほしかった」という言葉を贈りたいと、述べている。